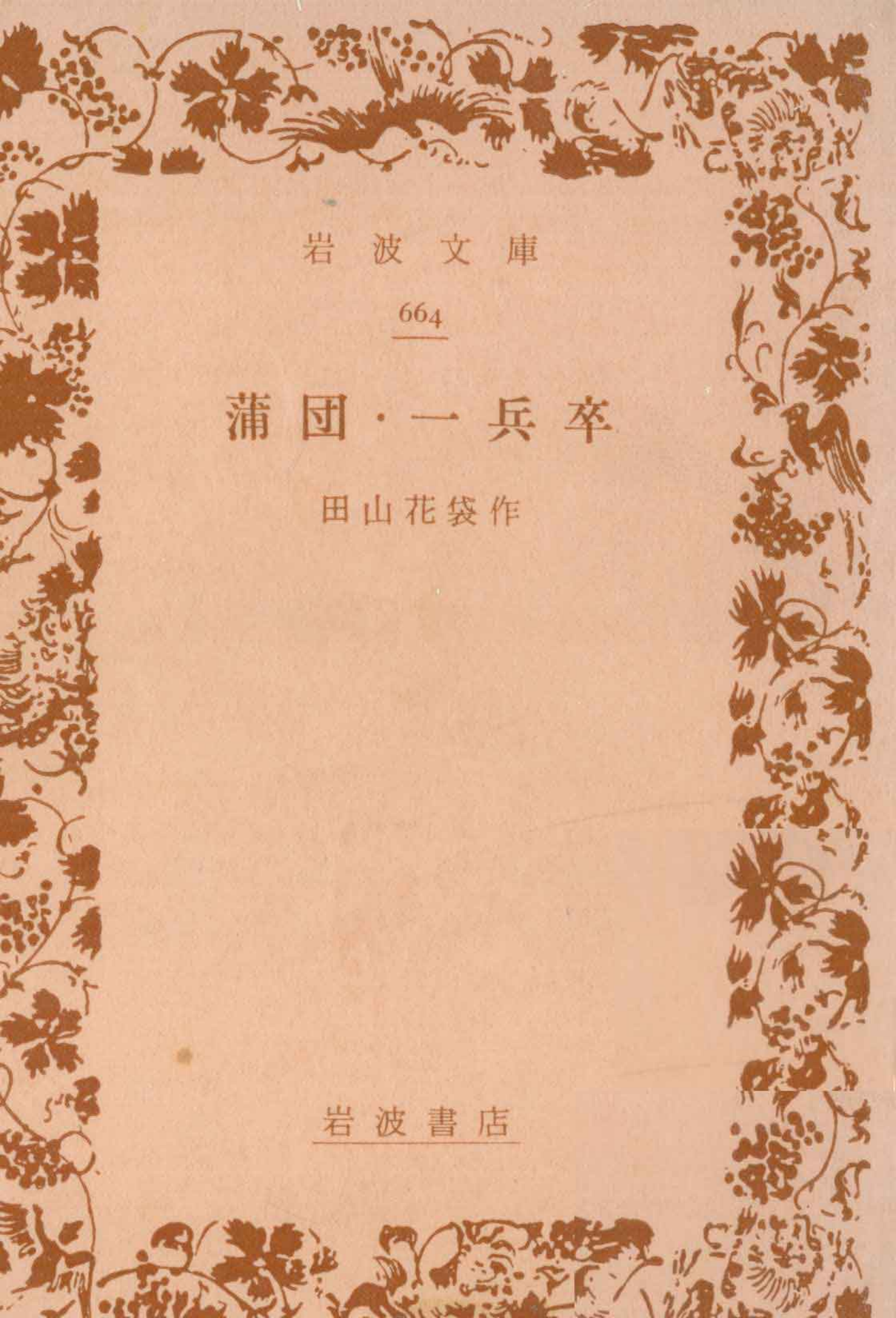




岩 波 文 庫

664

蒲 団 ・ 一 兵 卒

田 山 花 袋 作

岩 波 書 店

昭和五年七月一五日 第一刷発行
昭和四年三月一〇日 第四一刷発行

蒲団 一兵卒

定価 ★

作 者 田 山 花 袋

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地 岩 波 雄 二 郎

印刷者 東京都新宿区市谷加賀町一丁目一二番地 高 橋 武 夫

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩 波 書 店
神田一ツ橋二丁目

落丁本 乱丁本はお取替いたします

岩 波 文 庫

664

蒲 団 ・ 一 兵 卒

田 山 花 袋 作



岩 波 書 店

蒲

團

小石川の切支丹坂から極樂水に出る道のだらだら坂を下りようとして渠は考へた。「これで自分と彼女との關係は一段落を告げた。三十六にもなつて、子供も三人あつて、あんなことを考へたかと思ふと、馬鹿々々しくなる。けれど……けれど……本當にこれが事實だらうか。あれだけの愛情を自身に注いだのは單に愛情としてのみで、戀ではなかつたらうか。」

端

數多い感情づくめの手紙——二人の關係は何うしても尋常ではなかつた。妻があり、子があり、

端

世間があり、師弟の關係があればこそ敢て烈しい戀に落ちなかつたが、語り合ふ胸の轟、相見る眼の光、其の底には確かに凄じい暴風が潜んで居たのである。機會に遭遇しきへすれば、其の底の底の暴風は忽ち勢を得て、妻子も世間も道徳も師弟の關係も一舉にして破れて了ふであらうと思はれた。少くとも男はさう信じて居た。それであるのに、二三日來の此の出來事、此から考へると、女は確かに其の感情を偽り賣つたのだ。自分を欺いたのだと男は幾度も思つた。けれど文學者だけに、此の男は自ら自分の心理を客觀するだけの餘裕を有つて居た。年若い女の心理は容易に判斷し得られるものではない、かの溫い嬉しい愛情は、單に女性特有の自然の發展で、美しく見えた眼の表情も、やさしく感じられた態度も都て無意識で、無意味で、自然の花が見る人に一種の慰藉を與へたやうなものかも知れない。一步を譲つて女は自分を愛して戀して居たとしても、自分は師、かの女は門弟、自分は妻あり子ある身、かの女は妙齡の美しい花、そこに互に意

識の加はるのを如何ともすることは出来まい。いや、更に一步を進めて、あの熱烈なる一封の手紙、陰に陽に其の胸の悶を訴へて、丁度自然の力が此の身を壓迫するかのやうに、最後の情を傳へて來た時、其の謎を此の身が解いて遣らなかつた。女性のつゝましやかな性として、其の上に猶露はに迫つて來ることが何うして出來よう。さういふ心理からかの女は失望して、今回のやうな事を起したのかも知れぬ。

『兎に角時機は過ぎ去つた。彼の女は既に他人の所有だ！』

歩きながら渠はかう絶叫して頭髮をむしつた。

蒲 縞セルの背廣に、麥稈帽、藤蔓の杖をついて、やゝ前のめりにだら／＼と坂を下りて行く。時は九月の中旬、殘暑はまだ堪へ難く暑いが、空には既に清涼の秋氣が充ち渡つて、深い碧の色が際立つて人の感情を動かした。肴屋、酒屋、雜貨店、其の向うに寺の門やら裏店の長屋やらが連つて、久堅町の低い地には數多の工場の煙筒が黒い煙を漲らしてゐた。

其の數多い工場の一つ、西洋風の二階の一室、それが渠の毎日正午から通ふ處で、十疊敷ほどの廣さの室の中央には、大きい一脚の卓が据ゑてあつて、傍に高い西洋風の本箱、此の中には總て種々の地理書が一杯入れられてある。渠はある書籍會社の囑託を受けて地理書の編輯の手傳に従つて居るのである。文學者に地理書の編輯！渠は自分が地理の趣味を有つて居るからと稱して進んでこれに従事して居るが、内心此に甘じて居らぬことは言ふまでもない。後れ勝なる文學上の閱歷、斷篇のみを作つて未だに全力の試みをする機會に遭遇せぬ煩悶、青年雜誌から月毎

に受ける罵評の苦痛、渠自らに其の他日成すべきを意識しては居るものの、中心これを苦に病まぬ譯には行かなかつた。社會は日増に進歩する。電車は東京市の交通を一變させた。女學生は勢力になつて、もう自分が戀をした頃のやうな舊式の娘は見たくも見られなくなつた。青年はまた青年で、戀を説くにも、文學を談ずるにも、政治を語るにも、其の態度が總て一變して、自分等とは永久に相觸れることが出来ないやうに感じられた。

で、毎日機械のやうに同じ道を通つて、同じ大きい門を入つて、輪轉機關の屋を撼^{うご}す音と職工の臭い汗との交つた細い間を通つて、事務室の人々に軽く挨拶して、こつ／＼と長い狭い階梯を登つて、さて其の室に入るのだが、東と南に明いた此の室は、午後の烈しい日影を受けて、實に堪へ難く暑い。それに小僧が無精で掃除をせぬので、卓の上には白い埃がざらざらと心地悪い。

渠は椅子に腰を掛けて、煙草を一服吸つて、立上つて、厚い統計書と地圖と案内記と地理書とを本箱から出して、さて靜かに昨日の續きの筆を執り始めた。けれど二三日來、頭腦がむしやくしやして居るので、筆が容易に進まない。一行書いては筆を留めて其の事を思ふ。また一行書く、また留める、又書いてはまた留めるといふ風。そして其の間に頭腦に浮んで來る考は總て斷片的で、猛烈で、急激で、絶望的の分子が多い。ふと何ういふ聯想か、ハウプトマンの『寂しき人々』を思ひ出した。かうならぬ前に、この戯曲をかの女の日課として教へて遣らうかと思つたことがあつた。ヨハンネス・フオケラーの心事と悲哀とを教へて遣り度かつた。此の戯曲を渠が讀んだのは今から三年以前、まだかの女の此の世にあることをも夢にも知らなかつた頃であつたが、其

の頃から渠は淋しい人であつた。敢てヨハネスに其の身を比さうとは爲なかつたが、アンナのやうな女がもしあつたなら、さういふ悲劇に陥るのは當然だとしみじく同情した。今は其のヨハネスにさへなれぬ身だと思つて長嘆した。

流石に『寂しき人々』をかの女に教へなかつたが、ツルゲネーフの『ファースト』といふ短篇を教へたことがあつた。洋燈の光明かなる四疊半の書齋、かの女の若々しい心は色彩ある戀物語に憧れ渡つて、表情ある眼は更に深いく意味を以て輝きわたつた。ハイカラな庇髪、櫛、リボン、洋燈の光線が其の半身を照して、一卷の書籍に顔を近く寄せると、言ふに言はれぬ香水のかをり、肉のかをり、女のかをり——書中の主人公が昔の戀人に『ファースト』を讀んで聞かせる段を講釋する時には男の聲も烈しく戦へた。

『けれど、もう駄目だ！』

と、渠は再び頭髮をむしつた。

二

渠は名を竹中時雄と謂つた。

今より三年前、三人目の子が細君の腹に出來て、新婚の快樂などはとうに覺め盡した頃であつた。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生作に力を盡す勇氣もなく、日常の生活——朝起きて、出勤して、午後四時に歸つて來て、同じやうに細君の顔を見て、飯を食つて眠るといふ單調なる

生活につく／＼倦き果てて了つた。家を引越歩いても面白くない、友人と語り合つても面白くない、外國小説を讀み涉獵つても満足が出来ぬ。いや、庭樹の繁り、雨の點滴、花の開落などいふ自然の狀態さへ、平凡なる生活をして更に平凡ならしめるやうな氣がして、身を置くに處は無いほど淋しかつた。道を歩いて常に見る若い美しい女、出来るならば新しい戀を爲たいと痛切に思つた。

團

三十四五、實際此の頃には誰にでもある煩悶で、此の年頃に賤しい女に戯るゝものゝ多いのも、畢竟その淋しさを醫す爲めである。世間に妻を離縁するものも此の年頃に多い。

出勤する途上に、毎朝邂逅ふ美しい女教師があつた。渠は其の頃此の女に逢ふのを其の日其の日の唯一の樂みとして、其の女に就いていろ／＼な空想を逞うした。戀が成立つて、神樂坂あたりの小待合に連れて行つて、人目を忍んで楽しんだら何う……。細君に知れずに、二人近郊を散歩したら何う……。いや、それ處ではない、其の時、細君が懷妊して居つたから、不圖難産して死ぬ、其の後に其の女を入れるとして何うであらう。……平氣で後妻に入れることが出来るだらうか何うかなどと考へて歩いた。

蒲

神戸の女學院の生徒で、生れは備中の新見町で、渠の著作の崇拜者で、名を横山芳子といふ女から崇拜の情を以て充された一通の手紙を受取つたのはその頃であつた。竹中古城と謂へば、美文的小説を書いて、多少世間に聞えて居つたので、地方から来る崇拜者渴仰者の手紙はこれ迄にも随分多かつた。やれ文章を直して呉れの、弟子にして呉れのと一々取合つては居られなかつた。

だから其の女の手紙を受取つても、別に返事を出さうとまで其の好奇心は募らなかつた。けれど同じ人の熱心なる手紙を三通まで貰つては、流石の時雄も注意をせずには居られなかつた。年は十九ださうだが、手紙の文句から推して、其の表情の巧みなのは驚くべきほどで、いかなることがあつても先生の門下生になつて、一生文學に従事したいとの切なる願望。文字は走り書のすらすらしした字で、餘程ハイカラの女らしい。返事を書いたのは、例の工場の二階の室で、其の日は毎日の課業の地理を二枚書いて止して、長い數尺に餘る手紙を芳子に送つた。其の手紙には女の方として文學に携はることの不心得、女は生理的に母たるの義務を盡さなければならぬ理由、處女にして文學者たるの危険などを縷々として説いて、幾らか罵倒的の文辭をも陳べて、これならもう愛想をつかして斷念^{あきら}めて了ふであらうと時雄は思つて微笑した。そして本箱の中から岡山縣の地圖を搜して、阿哲郡新見町の所在を研究した。山陽線から高梁川の谷を遡つて奥十數里、こんな山の中にもこんなハイカラの女があるかと思ふと、それでも何となくなつかしく、時雄は其の附近の地形やら山やら川やらを仔細に見た。

で、これで返辭をよこすまいと思つたら、それどころか、四日目には更に厚い封書が届いて、紫インキで、青い罫の入つた西洋紙に横に細字で三枚、何うか將來見捨てずに弟子にして呉れといふ意味が返す^くも書いてあつて、父母に願つて許可を得たならば、東京に出て、然るべき學校に入つて、完全に忠實に文學を學んで見たいとのことであつた。時雄は女の志に感ぜずには居られなかつた。東京でさへ——女學校を卒業したものでさへ、文學の價值などは解らぬものなの

に、何も彼もよく知つて居るらしい手紙の文句、早速返事を出して師弟の關係を結んだ。

それから度々の手紙と文章、文章はまだ幼稚な點はあるが、癖の無い、すら／＼した、將來發達の見込は十分にあると時雄は思つた。で一度は一度より段々互の氣質が知れて、時雄は其の手紙の來るのを待つやうになつた。ある時などは寫眞を送れと言つて遣らうと思つて、手紙の隅に小さく書いて、そしてまたこれを黒々と塗つて了つた。女性には容色と謂ふものが是非必要である。容色のわるい女はいくら才があつても男が相手に爲ない。時雄も内々胸の中で、何うせ文學を遣らうといふやうな女だから、不容色に相違ないと思つた。けれど成るべくは見られる位の女であつて欲しいと思つた。

芳子が父母に許可を得て、父に伴れられて、時雄の門を訪うたのは翌年の二月で、丁度時雄の三番目の男の兒の生れた七夜の日であつた。座敷の隣の室は細君の産褥で、細君は手傳に來て居る姉から若い女門下生の美しい容色であることを聞いて少なからず懊惱した。姉もあゝいふ若い美しい女を弟子にして何うする氣だらうと心配した。時雄は芳子と父とを並べて、縷々として文學者の境遇と目的とを語り、女の結婚問題に就いて豫め父親の説を叩いた。芳子の家は新見町でも第三とは下らぬ豪家で、父も母も嚴格なる基督教信者、母は殊にすぐれた信者で、曾ては同志社女學校に學んだこともあるといふ。總領の兄は英國へ洋行して、歸朝後は某官立學校の教授となつて居る。芳子は町の小學校を卒業するとすぐ、神戸に出て神戸の女學院に入り、其處でハイカラな女學校生活を送つた。基督教の女學校は他の女學校に比して文學に對して總て自由だ。其

の頃こそ『魔風戀風』や『金色夜叉』などを讀んではならんとの規定も出て居たが、文部省で干涉しない以前は、教場でさへなくば何を讀んでも差支なかつた。學校に附屬した教會、其處で祈禱の尊いこと、クリスマスの晩の面白いこと、理想を養ふといふことの味をも知つて、人間の卑しいことを隠して美しいことを標榜するといふ群の仲間となつた。母の膝下が戀しいとか、故郷が懷しいとか言ふことは、來た當座こそ切實に辛く感じもしたが、やがては全く忘れて、女學生の寄宿生活を此上なく面白く思ふやうになつた。旨味い南瓜を食べさせないと云つては、お鉢の飯に醬油を懸けて賄方を酷めたり、各監のひねくれた老婦の顔色を見て、陰陽かげひなたに物を言つたりする女學生の群の中に入つて居ては、家庭に養はれた少女のやうに、單純に物を見ることが何うして出來よう。美しいこと、理想を養ふこと、虚榮心の高いこと——かういふ傾向をいつとなしに

受けて、芳子は明治の女學生の長所と短所とを遺憾なく備へて居た。

尠くとも時雄の孤獨なる生活はこれによつて破られた。昔の戀人——今の細君。曾ては戀人には相違なかつたが、今は時勢が移り變つた。四五年來の女子教育の勃興、女子大學の設立、庇髮、海老茶袴、男と並んで歩くのをはにかむやうなものは一人も無くなつた。この世の中に、舊式の丸鬘、泥鴨あひるのやうな歩き振、溫順と貞節とより他に何物をも有せぬ細君に甘んじて居ることは時雄には何よりも情けなかつた。路を行けば、美しい今様の細君を連れての睦じい散歩、友を訪へば夫の席に出て流暢に會話を賑かす若い細君、まして其の身が骨を折つて書いた小説を讀まうでもなく、夫の苦悶煩悶には全く風馬牛で、子供さへ満足に育てれば好いといふ自分の細君に對す

ると、何うしても孤獨を叫ばざるを得なかつた。『寂しき人々』のヨハネスと共に、家妻といふものの無意味を感じずには居られなかつた。これが——この孤獨が芳子に由つて破られた。ハイカラな新式な美しい女門下生が、先生！先生！と世にも豪い人のやうに渴仰して來るのに胸を動かさずに誰が居られようか。

最初の一月ほどは時雄の家に假寓して居た。華やかな聲、艶やかな姿、今迄の孤獨な淋しいかれの生活に、何等の對照！産褥から出たばかりの細君を助けて、靴下を編む、襟巻を編む、着物を縫ふ、子供を遊ばせるといふ生々した態度、時雄は新婚當座に再び歸つたやうな氣がして、家門近く來るとそゝるやうに胸が動いた。門をあけると、玄關には其の美しい笑顔、色彩に富んだ姿、夜も今迄は子供と共に細君がいぎたなく眠つて了つて、六疊の室に徒に明らかな洋燈も、却つて侘しさを増すの種であつたが、今は如何に夜更けて歸つて來ても、洋燈の下には白い手が巧に編物の針を動かして、膝の上に色ある毛絲の丸い玉！賑かな笑聲が牛込の奥の小柴垣の中に充ちた。

けれど一月ならずして時雄はこの愛すべき女弟子を其の家に置く事の不可能なのを覺つた。従順なる家妻は敢て其の事に不服をも唱へず、それらしい様子も見せなかつたが、しかも其の氣色は次第に悪くなつた。限りなき笑聲の中に限りなき不安の情が充ち渡つた。妻の里方の親戚間などには現に一問題として講究されつゝあることを知つた。

時雄は種々に煩悶した後、細君の姉の家——軍人の未亡人で恩給と裁縫とで暮して居る姉の家

に寄寓させて、其處から麴町の某女塾に通學させることにした。

三

それから今回の事件まで一年半の年月が経過した。

其の間二度芳子は故郷を省^{せい}した。短篇小説を五種、長篇小説を一種、その他美文、新體詩を數十篇作つた。某女塾では英語は優等の出來で、時雄の選擇で、ツルゲネーフの全集を丸善から買った。初めは、暑中休暇に歸省、二度目は、神經衰弱で、時々癪のやうな瘵癰を起すので、暫し故山の靜かな處に歸つて休養する方が好いといふ醫師の勧めに従つたのである。

團

蒲

其の寓して居た家は麴町の土手三番町、甲武の電車の通る土手際で、芳子の書齋は其の家での客座敷、八疊の間、前に往來の頻繁な道路があつて、がや／＼と往來の人やら子供やらで喧しい。時雄の書齋にある西洋本箱を小さくしたやうな本箱が一閑張の机の傍にあつて、其の上には鏡と、紅皿と、白粉の罎と、今一つシュウソカリの入つた大きな罎がある。これは神經過敏で、頭腦が痛くつて爲方が無い時に飲むのだといふ。本箱には紅葉全集、近松世話淨瑠璃、英語の教科書、ことに新しく買ったツルゲネーフ全集が際立つて目に附く。で、未來の閨秀作家は學校から歸つて來ると、机に向つて文を書くといふよりは、寧ろ多く手紙を書くので、男の友達も随分多い。男文字の手紙も随分來る。中にも高等師範の學生に一人、早稻田大學の學生に一人、それが時々遊びに來たことがあつたさうだ。

麴町土手三番町の一角には、女學生もさうハイカラなのが澤山居ない。それに、市ヶ谷見附の彼方には時雄の妻君の里の家があるのだが、この附近は殊に昔風の商家の娘が多い。で、尠くとも芳子の神戸仕込のハイカラはあたりの人の目を聳たしめた。時雄は姉の言葉として、妻から常に次のやうなことを聞かれる。

『芳子さんにも困つたものですねと姉が今日も言つて居ましたよ、男の友達が来るのは好いけれど、夜など一緒に二七（不動）に出かけて、遅くまで歸つて來ないことがあるんですつて。それや芳子さんはそんなことは無いのに決つて居るけれど、世間の口が喧しくつて爲方が無いと云つて居ました。』

これを聞くと時雄は定つて芳子の肩を持つので、『お前達のやうな舊式の人間には芳子の遣ることなどは判りやせんよ。男女が二人で歩いたり話したりさへすれば、すぐあやしいとか變だとか思ふのだが、一體、そんなことを思つたり、言つたりするのが舊式だ、今では女も自覺して居るから、爲ようと思ふことは勝手にするさ。』

此の議論を時雄はまた得意になつて芳子にも説法した。『女子ももう自覺せんければいかん。昔の女のやうに依頼心を持つて居ては駄目だ。ズウデルマンのマグダの言つた通り、父の手からすぐに夫の手に移るやうな意氣地なしでは爲方が無い。日本の新しい婦人としては、自ら考へて自ら行ふやうにしなければいかん。』かう言つては、イブセンのノラの話や、ツルゲネーフのエレネの話や、露西亞、獨逸あたりの婦人の意志と感情と共に富んで居ることを話し、さて、『け

れど自覺と云ふのは、自省といふことをも含んで居るですから、無闇に意志や自我を振廻しては困るですよ。自分の遣つたことには自分が全責任を帯びる覺悟がなくては。』

芳子にはこの時雄の教訓が何より意味があるやうに聞えて、渴仰の念が愈々加はつた。基督教の教訓より自由でそして權威があるやうに考へられた。

芳子は女學生としては身装が派手過ぎた。黄金の指環をはめて、流行を趁つた美しい帶をしめて、すつきりとした立姿は、路傍の人目を惹くに十分であつた。美しい顔と云ふよりは表情のある顔、非常に美しい時もあれば何だか醜い時もあつた。眼に光りがあつてそれが非常によく働いた。四五年前までの女は感情を顯はすのに極めて單純で、怒つた容かたちとか笑つた容とか、三種、四種位しか其の感情を表はすことが出来なかつたが、今では情を巧に顔に表はす女が多くなつた。芳子も其の一人であると時雄は常に思つた。

芳子と時雄との關係は單に師弟の間柄としては餘りに親密であつた。此の二人の様子を觀察したある第三者の女の一人が妻に向つて、『芳子さんが來てから時雄さんの様子は丸で變りましたよ。二人で話して居る處を見ると、魂は二人ともあくがれ渡つて居るやうで、それは本當に油斷がなりませんよ。』と言つた。他から見れば、無論さう見えたとに相違なかつた。けれど二人は果してさう親密であつたか、何うか。

若い女のうかれ勝な心、うかれるかと思へばすぐ沈む。些細なことにも胸を動かし、つまらぬことにも心を痛める。戀でもない、戀でなくも無いといふやうなやさしい態度、時雄は絶えず思